OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	織物に見るシルクロードの文化交流 トゥルファン出土染織資料-錦綾を中心に
Author(s)	坂本, 和子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2683
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【19】

氏　　名	坂本和子（さかもとかずこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　２１６８２　号
学位授与年月日	平成 20 年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	**織物に見るシルクロードの文化交流　トゥルファン出土染織資料－錦綾を中心に**
論文審査委員	（主査） 教　授　森安　孝夫 （副査） 教　授　荒川　正晴　　准教授　青木　　敦

論　文　内　容　の　要　旨

人類文化史上、麻・亜麻・羊毛・棉などの織物は普遍的に存在するが、高級品に着目すると、そこに凝縮される技術の発展とデザインの変化を辿ることによって、ユーラシア史上における壮大にして華麗な文化交流の一端が明らかとなる。絹織物はどれも高級品と言えるが、とりわけ高級な中国の経錦（たてにしき）は紀元前の漢代から西方へ流入していた。そして、紀元後２世紀前後になると毛織物文化圏の中心地でその経錦の技術の影響を受けた緯錦（よこにしき）が生み出された。まずエジプトで羊毛の緯錦が織られたが、ほどなく中国産の輸入絹を用いた緯錦が織り出され、今度は逆にその緯錦技法が東へ伝わっていった。そして早くも４世紀には絹の綾組織緯錦がペルシアまで、平組織緯錦が中央アジアのトゥルファンにまで到達していた。本論文が考察の中心にすえるのは、このトゥルファンから出土した多種多様の絹織物の実物である。

トゥルファンは古くから毛織物文化圏の東端に位置し、東の絹織物文化圏に接する交通の要衝であったので、多くの織物が行き交い、トゥルファンの人々のもとに留まった多くの絹織物が遺跡から出土した。トゥルファンでは 19 世紀末に始まる欧米列強並びに日本の中央アジア探検隊の活動により、さらにその後 1950 年代に始まる中国側の発掘によって実に多くの古代～中世の絹織物が発見された。それらは４～８世紀のグループと９～14 世紀のグループに二大別される。

このうち古い方の代表がカラホージャ・アスターナ墓群出土染織資料であるが、なかでも文化交流を跡づける上で最も注目されるのが、連珠円内に動物が単独で表される文様の錦（連珠円内単独文錦）と連珠円内に動物が対称に表される文様の錦（連珠円内対称文錦）である。従来の研究ではその生産地に関して激しい議論があり、後者に関しては中国産ということで落ち着いたが、前者に関しては未だ見解の一致を見ない。その見解の相違は、毛織物文化圏での生産（緯錦）とみるか絹織物文化圏での生産（経錦）とみるかという点にあり、具体的にはペルシア・ソグド地域（イラン文化圏）生産説とトゥルファン・中国（中国文化圏）生産説に集約される。申請者は、中国文化圏生産説が拠り所とする連珠円内単独文錦が経錦であるとする説を、実物に即した技術面と美術史を含む歴史学的背景から徹底的に批判した。その際、比較の対象として、欧米各地の教会や博物館に散在するペルシア錦・ソグド錦とみなされる資料にも目を向け、連珠円内単独文錦はイラン文化圏で生産された綾組織緯錦であると結論付けた。一方、トゥルファン出土の連珠円内対称文錦については、中国本土の蜀（四川）の生産であるとする説を支持した。

次に９～14 世紀のグループに属する資料として、大谷探検隊収集で龍谷大学所蔵の三日月文錦と、ドイツ探検隊収集でベルリンのアジア美術館に所蔵される棉ベルベット並びに花唐草文様金襴を取り上げる。三日月文錦については、

綾組織緯錦でZ撚りの経糸が使われるなど西方の技術の特徴が見られること、さらに織り込まれた文字と文様から窺えるイスラム文化との密接な関係を指摘し、9～10 世紀にイスラム圏東辺で製作されトゥルファンにもたらされたと結論した。棉ベルベットについては、そもそも中央アジアとくにトゥルファンが紀元後 4 世紀頃から棉花・綿織物の特産地となっていく歴史的背景のもと、インド由来の棉ベルベットが当地で生産可能となる過程を考察した。そして花唐草文様金襴については、これがランパ組織という最も複雑な織り方で織られており、その金糸を作るための金箔の下地は中国産金襴の場合は紙であるのに、これはそれと違って腸膜であることを突き止め、それが有名な西アジアの「ナシシ」織の技術的伝統を継ぐものであると断定した。その背景としては、チンギス汗西征時の 1221 年にヘラートのナシシ織工がトゥルファン北方の重要都市であるビシュバリクに連行された史実と、さらに 13 世紀後半に元朝の首都大都（北京）の近郊やビシュバリクに織物局が置かれ、西方のナシシと中国本来の金襴とが合体した新しいナシシ（納失失）が作られた可能性が指摘される。

まとめにおいては、絹織物全体の技術と文様の発展史について総覧する。漢代までに平地浮文綾・平組織経錦・羅・平地浮文綾変化形・平地綾文綾・経パイル組織などが完成しており、その後に平組織緯錦・綾組織緯錦・綾組織経錦・絹綴織・綾地綾文綾・綾地浮文綾が順々に出現し、更に 9 世紀以降、両面 1/2 綾組織緯錦・両面 1/4 繻子組織緯錦・ランパ組織・緯パイル組織が出現するという、織組織の技術的交流と発展がほぼ明らかにされた。一方、主にトゥルファン出土品に基づいて文様の発展を辿れば、漢代の文様の名残からペルシア文様の影響を受けた連珠円文へ、さらに花文へと移行し、それらは次第に複雑で大文様となり、豪華絢爛な織物文様が出現した。しかし、771 年の華美な文様を禁じる勅令によって、幅いっぱいの円文や動物文は姿を消した。その代わりに鳥や蝶などの自然の風物や牡丹などが表されるようになっていき、北宋から南宋、遼から金朝にかけてこの自然を愛好する流れは続いた。一方、龍や鳳凰も好まれ、それは紙が下地の中国式金糸で表された。モンゴル帝国時代になると、西アジアで発達した動物の腸膜や皮が下地の金糸を使った織物が中国に技術移転され、中国の文様を取り入れた新しくて豪華な「納失失」としてユーラシアの東西に流布した。

論文審査の結果の要旨

絹織物の歴史についてはこれまで佐藤武敏の文献学的研究である『中国古代絹織物史研究』（２巻、1977－78）が金字塔となっているが、実物による研究には及んでいない。一方、実物による研究は日本・中国・英・独・仏・露それぞれにおいてかなりの蓄積があるが、その多くは文献による裏付けが弱い。文献と実物の両者を合体した本格的研究は、意外なほど新しいのである。絹織物と毛織物の専門家である申請者は、実物断片から織物の技術を復元する能力を有し、それを駆使してユーラシアの壮大な文化交流の歴史が凝縮されている絹織物遺物を実際に調査しながら、文献研究にも通じることによって、新たな地平に到達した。

中央アジアのトゥルファンから出土した多種多様の絹織物の実物の由来を、技術面と文様面から研究する上で重要な比較資料は、中国からヨーロッパに至るシルクロードに沿う各地に残る伝世品や、各遺跡からの出土遺品であり、さらに中央アジアの壁画なども参考になる。一方、漢籍やギリシア語・アラビア語・ペルシア語・ウイグル語などの文献記録も確実な手がかりとなる。これら多面的な情報を収集するには中国語・英独仏露語の素養が必要となるが、申請者はそれもクリアしている。特にそのロシア語能力は高く、それによって旧ソ連時代からモスクワ・ペテルブルクの研究者と交流してきたが、そのような背景なくして本論文は成立しなかった。

東西文化交流史は可視的な壁画や織物の文様など美術史的方面からなされることが多かったのに対し、目に見えにくい技術史に力点を置いたのが本論文の特徴である。本論文の大きな成果の１つは、ペルシア錦・ソグド錦と断定できる実物の調査をした上で、トゥルファン出土の連珠円内単独文錦をイラン文化圏で生産された綾組織緯錦であると結論付けた点である。さらにトゥルファン出土品の中から初めて棉ベルベットとナシシ（納失失）の原物を発見したこと自体が大きな貢献であるが、さらにその歴史的意義をも論じた。その他にも成果は非常に多く、今後、本論文が公表されたならば学界で大きな位置を占めるものとなることは間違いない。しかしながら、その記述は技術面と文様面の両方に亘り、まだ整理し切れていないために読みにくい箇所も散見されるので、公表までには一層の精進が要請される。とはいえ、そのような文章構成上の不備は、本論文の絹織物史研究に対する巨大な貢献を損なうものではなく、よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。